

136
3
227

宗義要論

叙言

若し夫れ宗教より其信仰を除き去らるる餘すところ唯だ是を理想ある而已宗教其効益亦た受くまか不在らん蓋し宗教其効益ハ學術に在らざして道義に在り理想にあらざして信仰に在り然らば則ち道理を以て其感情を咀嚼せんより寧ろ感情を以て其道理を味ふの主分たるを知る也、それ信仰ハ宗教其物の一大要素にして若し此信仰てふ一要素を欲くときを宗教の宗教たる價值無く所謂泰西諸學士の建設せる哲學論に陥らんのみ是れ寔に今論宗教を辨するに

其要として信仰を勸發唱導する所以なり而して其信仰とハ果して如何なるもの乎又た果して如何なるものならざるべからざる乎ハ讀者本文に就て之を知るべし、

予の非才淺學なる敢て叨りに發明するところあるに非ず予え予の言の正しきと否とを知らず又此の説の果して世に容れらるゝや否やをも知るものに非れども各人の心底にハ亦た自ら各異の天地あまは予ハたゝ予の信するところを信し予の信するところを説かんのみ然り而して予が此著たるや茲に僅々數日間の閑餘

特46
144

を竊んて匆卒之を草稿せしものにして敢て脩辭行文の巧拙を顧みるに違まあらされハ定んて閲讀の苦澁多々ならん讀者幸に之を恕せよ

明治二十二年十一月 著者識す

るものにして若し夫れ所須系發して而も之れに酬應するところの供給系無らんには吾人の實在と存立とは倏ち消耗夷滅すへし然るに吾人類の幾多の消長榮枯の間に能く生を全ふし命を持つ所以はたゞ一其要求に應ずる供給物の存するありて然るを知るなり、夫れ吾人類の體軀上には飲食呼吸温度てふ三者の需要ありて此の需要に應ずるものは食物空氣温暖の三資なり又精神上には精神其物の發達と満足とに向ふて心理的宗教道義の材料を要す此宗教道義あるに非れば精神の發

達と満足とを覓むる能はざるは猶し食物空氣温暖あるに非れば軀體の健康靜寧を求むる能はざるか如し故にたとひ心理的精神上には既に幾多の感情慾望を存するも之を發誘し之を扱足するところの適當なる供給材料無らんには其姱麗淑美の性質も逆遭進まず遂に潜伏して止んのみこれ寔に吾人類に於て宗教道義の必要を感ずる所以なり今論せんとするところの要點また正しく此に在りとす然るに此の所須と給資の關係を論ずるに當り殊に先づ其所須なるもの供給なるものは各人同一なるか將た

不同なることを辨せざるを得ず、若し夫れ所須にし
 て伏臘ありとせば之れに應ずる給資亦冷熱無
 きを得ず、又其要求にして一濟なりとせば供給
 従て同一なるは理の見易き所なり、今軀軀上に
 於ける此の二者は敢て言を待たざる事實なれと
 も其精神上に於ける所須と給資とに付てハ吾
 人聊か辨ずるところあらんとす、謂く時運の變
 遷、人智の發達は等社會の境遇に由りて人類精
 神上宗教心の發達に自ら差排を生ずるは吾人
 の既に己に認識せるところなり、古代今時宗教
 進歩の經歷を見るに自然進化の理法は劣等より

高等に妄想より眞理に不完全より完全に臻達
 進涉し以て今日に蔽れるなり、然り發達の順序
 は實に生存の境遇に關係し従て要求給資亦た
 自ら其差等あり、然りと雖も人生一般終極の要
 求と之れは應ずる究竟の供給物は蓋し精密に
 均同なるべきを知る縱令彼れ等人類が智力の
 洩はさるところあるも感情は之を以て歎む能
 はざして究極の目的を果遂するまでは尙ほ求
 めて慚かざるべし、
 且つ厥れ宗教は皆に人類一個に於て必要なる
 のみならず吾人々類が結成せる社會万有に對

して亦た大なる關係を有するものなりベンザ
ム氏曾て宗教の効用を論して曰く宗教はたゞ
一個人に必要なる而已ならずまた其社會に接
して特大の効益ありと然り今吾人をして少く
其事實を説かしめよ試みに茲に職業を教ゆへ
ぎ一種の民族あり教育以て之を薰陶し輿論以
て之を鞠毬せんに其民族の性質と習慣の如何
とに拘はらず此教育に附着し必ず一種の勢力
を啓發すへきを知る、宗教の感化に於ける亦
然りとす教訓以て自然の人性を開導し勸誘以
て道義の勢力を養せんに其感化を享けし民

族は此の境遇に根據して必ず一種特様なる信
仰てふ勢力を發す然るにもし夫れ其信仰力に
して澁毒淫濊なれば其社會は倏ち阿片的彈丸
的の血天地刀宇宙と化せん之れに反して若し
其信仰力にして眞實善美なれば其社會を温和
的徹妙的の樂乾坤光世界と變せん社會に關す
る宗教道義の勢力をれ如此、若し一たひ矚瞳を
注て古今歐洲社會の全歴史を一看せば容易に
其事實を知り得へきなり、先づ古代ローマノ晚
筆よ於けるか如きハ厥レローマ民族が既に一
國民として存立するの勢力を失ふや渠等が曾

て快劍鉄蹄以て金地を蹂躪し疾風霹靂の勢ひ
 以て其山河草木を震動せし邦士民族なるにも
 關をらず制伏せられたる民族は却て復たロー
 マを制伏し主客全然其地を換ゆるに洎へり、蓋
 しローマの隆盛かる時代ハ宗教道義の振發せ
 し時にして其宗教道義の腐敗せしときハこれ
 即ちローマの滅亡に皈するときなるを知る、又
 彼の歐洲暗黒時代なるものを追想せんに夫等
 不活潑無氣力なる世紀ハ其國民道義の感情稀
 薄にして才かに罪惡の有無を判するにハオー
 ーとを以てするか如き野蠻の妄想容易に行ハれ

當時明智秀才を以て聞へたるシーアローマン帝
 にして尙ほ奥く之を信せりと云へり此時や人
 智ハ衰敗委菲し德操ハ淹沈腐敗し氣力は惰窳
 疲隸し社會一般事物の没落する實に此に極ま
 れりと云ふへし然るに漸く移りて第十二世紀已
 後の天地に來りてハ恢に國家の面目を一變し
 所謂煩瑣哲學の起るか如き時運に達し人智頓
 に洞達し道心從て勃興すこれ今日新鮮姸美な
 る歐羅巴文化燦爛工藝斐彩の新舞臺も其礎地
 恐くは此時に在りて存すへし然り此の如く其
 腐敗の空氣を一滌し人生貴重の道義てふ感情

と社會の脈管に注入し國家隆盛の氣運を造り
出せしはこれごとく、宗教感化の勢力興りて
効あり、又近く東洋の歴史を見るに曩時印度
昌輝煜の世紀や高尚優美清淨温和てふ氣質は特
り印度國民に在りて之を相る其の文物燦然赫
義烟晃たる活天潑地たりしハ世人の既に能く
認識するところなり然るに物換り星移り今日
の印度國を一瞥せんか吾人ハ其變遷の大なる
に喫驚せすんえあらず、廟謨一たひ其針路を誤
るや越々力を勵ますの義士に乏く昔日旣襖襪
祥の土壤も今日え舉て之を英人の手裡よ死せし

めたり是れ同く國民道義の腐敗之れハ原因た
らずえあるへからず、國民の道義腐敗せんか國
家の元氣率て衰耗す於此貪婪狡猾なる豺豕豺
狼え巧に其勢を張り弱肉これ搥き貧骨これ纏
すへしと譴譎譎誑以て其慾を姿にす國家の滅
亡する勢ひ止むへからざるなり今日の印度國ハ
瘴霧癘煙蚤雨離風、蓄黃凋みて蒿草蒼り唯一、荒
墟悲風に咆哮する寒孤あるのみ、蓋し世に宗教
道義衰へて未だ其國民侯攜離散せざるものな
かるへし宗教道義と國家民族とハ生存の理數
殆んと正比例の現象を描くものなり、

更に一例を舉ぐに一國の自由の爲めに憤戦する志士、一個幸福の爲めに苦酸する英雄、真理の爲に艱難する義人、良心の爲めに刻苦する仁人、渠等が恒に肅然猛威の感情を懷抱し私利を忘れて真理を愛し名譽を抛つて愛國の款情を盡すものみなこれ彼等が心靈に附着する至尙至貴の感動力に來由せざるなきなり此感情や實に宗教道義の賜なりと云ふへし。果して然らば宗教は各個人に在りて、其生命を完全にし其幸福を尅逐するところの勢力なり又社會に在りては平和を維持し姍美を増長する原動力

なり吾人の既に尤盛平和の社會を造り出し快樂利便の源泉を拓き得んとす然らば亦た宜く社會人情に投合し學術智識と併行し進歩其信仰の勢力を増すも敢て動一變せざる眞正なる宗教道義を選定せずんばあはかすれ如何なる宗教能く之れに適合あるか又た如何なる宗教道義ならざるか蓋しナイル河畔鱈魚宗拜の教義あるかシユデヤベスレヘム村落の教法あるか將た中央印度釋迦佛陀開顯の宗教なるか理勢の必到するところ豈其一物無くして止まんや

寧ろ他の一新信仰を希望して止まざるもの
 如しこれ此流潮に際したとる彼れ一神教徒
 の執拗にも舊信仰を維持せんとするも文化の
 大勢を却て先づ彼れの信仰を壓倒するを奈何
 せん思ふて此に至れハ彼一神教々徒の胸中に
 於ける輓軻憂鬱の哀情を吾人をして實に想像
 に堪へざらしむ然るに今斯くの如き現象
 事實を目撃するに及ひしハ果して何の故ぞ蓋
 し。クリスト教の信仰や是れ未だ迷信の範圍内
 を免まざるを發見されはなり、
 それ一進一退一盛一衰ハ事物自然の法則にし

て社會の趨勢生存の境遇に録りて其消長榮枯
 の變化を免れざるハ則ち去るものハ彼まに去
 らざるを得ざるものハ此に來らざるを得ざ
 るなり今や澁滯して止まるものハクリスト一
 神教の信仰かり發動して進むものハ文化の大
 勢なり然らば此の優勝劣敗の競争場裏に立て
 一戦一勝百闘百利愈々其勢力を増進ものハ恐
 るハクリスト迷信の外他に一物の存するある
 を知るべし、を推理を尙んて想像を信せず迷
 信を避けて真信に赴かんとするハ第十九世紀
 已後の氣運にして學術ハ愈々精緻となり智識

第二信仰の理由

ナイル河畔動物崇拜の多神教一たひ其勢力を失ふや、ベスレヘムノ一神教之に代えりて立ち爾後歐州諸邦の人心を支配して現時尙ほ信仰の勢力を有するに似たり、然らば此一神教を將來文化の大勢と相提挈して永く其人心を支配し得べき勢力ありとせんか、是れ今吾人が大に論ずるところあらんとするものなり、回顧されば彼れクリスト一神教の昔日ハ最も簡潔美麗の良宗教にして教義の一たひ無道義極まれるローマに侵入するや鮮血以て渠等の熱心

を勵ましコンスタンチン大帝が十字の徽標を夢想せし頃ひの如きハ實に又軍の銃鋒を駸々として到るところに其利を占め向ふところに其敵を伏す十字標幟の勢力亦偉大なりと言ふべし、然るに一轉して今日の世局となりてハ滔天翻海の一大波瀾を彼れクリスト一神教の屋舎を破壊し次て其基礎をも償倒し去らんとせり、クリスト一神教の世界ハ其天裂け其地割れ亂雲急雨四疆黯澹たり、看よ歐洲諸民族の感情にえ其クリスト天國の愉快も尙ほ愉快を感せぬそのクリスト地獄の苦逼も尙ほ苦逼を怖れ

寧ろ他の一新信仰を希望して止まざるもの
 如しそれ此流潮に際したとる彼れ一神教徒
 の執拗にも舊信仰を維持せんとするも文化の
 大勢を却て先づ彼れの信仰を壓倒するを奈何
 せん思ふて此に至れハ彼一神教々徒の胸中に
 於ける輓軻憂鬱の哀情を吾人をして實なる想像
 に堪へざらしむ然り然るに今斯くの如き現象
 事實を目撃するに及ひしハ果して何の故ぞ蓋
 し。ク。リ。ス。ト。教。の。信。仰。や。是。れ。未。だ。迷。信。の。範。圍。内。
 を。免。ま。さ。る。を。發。見。せ。れ。は。な。り。
 それ一進一退一盛一衰ハ事物自然の法則にし

て社會の趨勢生存の境遇に繰りて其消長榮枯
 の變化を免れざるハ則ち去るものハ彼を去
 らざるを得ざるものハ此に來らざるを得ざ
 るなり今や澁滯して止まるものハクリスト一
 神教の信仰を發動して進むものハ文化の大
 勢なり然らば此の優勝劣敗の競争場裏に立て
 一戦一勝百闘百利愈々其勢力を増長ものハ恐
 くハクリスト迷信の外他に一物の存するある
 を知るべし、を推理を尙んて想像を信せず迷
 信を避けて真信に赴かんとするハ第十九世紀
 已後の氣運にして學術ハ愈々精緻となり智識

は益々高度に達するのときハ是を即ちクリス
ト信仰の生命を絶つの時也クリスト教徒が如
何に熱心剛氣に信仰を維持せんとせむも社會
流潮の逆るところ得て抵抗すへからば宇宙眞
理の向ふところ得て拒絶すへからざるかり然
り迷信妄想の暗夜ハ漸く去りて眞理信仰の日
光將に逼まらんとせむは今日の世局に於ける
社會の傾向、民心の氣運なきば彼も一神教の命
脈また推して知るべき而已

論者或は言はん那邊の國ぞクリスト信仰の勢
力衰微せむまた那樣の世界一神教の版圖減
殺せむと然り其隆盛誇美なる現象あるにも
關はらず吾人が一神教の命脈を喃々せむもの
亦た徒然と非るなり請ふ看よ禍の起るは興る
の日に初て興るに非ざ必ずや其由て來るとこ
ろあるに非ずや今まクリスト教の運命に於け
る其理亦た同一轍なるのみ被せクリスト教の
衰ふると云ふも衰ふるときに初めて衰ふるに
あらず必だ其由て來るところ無くんばあるへ
からず誰をか知らん今日彼等盛大美麗の現象
には他日衰耗夷滅の分子の潜在せるにあらず
る無きと表面粲然微妙なるも裏面隱然衰凋の

傾向ハ無き乎蓋し是を識者の容易に洞見せらる
 ところにして淺見の能く窺ひ知るところに非
 るなり況んや其教海に迷溺せるものに於て
 れや若し一步を轉して其教法と其國家との
 關係を觀察するに若しクリスト信仰にして能
 く國家に適合し民心に契應すと云ハハ恐くハ
 其國家ハなほ半開化にして其民族ハなほ半野
 蠻ならんたとひ物質的にえ輝々目を射るの華
 色、奇異人を驚かすの怪形あるも恰も錦繡を
 以て汚物を掩へるに均し何ぞ之を眞正の文化、
 實際の開明と稱せん思ふて此に至きハまこと

にクリスト信仰の薄弱なると泰西文化の幼稚
 なるにハ吾人殆んど喫驚に堪へざるなり」
 スペンサー氏曾て宗教進化の原理を叙して言
 く、妄想の信仰ハ二要素の爲めに撲滅せらるべ
 し其二要素とハ謂く一ハ則ち高尚なる心情の發
 達にして他ハ則ち完全なる智識の進歩なりと、
 然り若し夫き高尚なる心情發達せんか卑劣な
 る信仰の觀念ハ頓に滅せし、又た完全なる智
 識進歩せんか從來未熟の解釋を容きざるなり
 彼の一神教々徒をして驚倒愧死せしめ一般社
 會の迷妄を喝破せるもの實にス氏一筆の勢力

に在りと云、ス。氏も亦た一英雄の分なるか夫を
 今日の世局ハ不完全なる教義は民類の信仰心
 を維くに足らざる不充分なる理由は理由として
 之を信ぜざるもの鮮し人智の發達ハ妄想的の信
 仰を壓倒して敢て顧みるところ無きなり既に
 智識と迷信とは併行せべきものに非ざる一者
 起きて一者倒れ一者起らざるハ一者亦倒れざる
 なるなり今ハ早や智識の太陽東天に出てたり豈
 妄想の暗霧拂散せざらざる止まんや炎天熱風に
 霜地氷雨の奇觀ハ永く維持せざるへきものに非ざる
 哀ハ甚クリスト十字型上の鮮血も蓋し無用に

屬せん而已、然るに彼のマシーナーアノルド
 氏ハ云はくリスト教ハ智識上之を批難せべ
 きも倫理上敢て非視せざるところ無しとこきた
 ゞにア氏一り斯く言ふのみならず世の多數な
 るクリスト信者の之を同一様の思想に住せ
 るも比々皆然りと云、吾人云ハく夫を智識
 上既に批難を免せざらんハ何ぞ能く之を信仰せ
 ることを得んや若し理想の礎地に樹立せざる
 信仰即ハち智識と相提挈せざる信仰にしあま
 ば所謂迷信なることまた智者を待て知らざる
 なり、智識上業に已に非視せざるもの豈に倫理上

亦た能く之を是定し得けんや、思ふにアーノル
ド氏の言ハ第十九世紀已前野蠻未開の當代に
ハ或ハ適用せへきあるも其第十九世紀已後ハ
天地に於てハ通用せへきものにあらざるを知
るなりと、
抑も信仰なるも此ハ是を偶然に發生するも此
に非ず又自爾に成熟するものに非ず蓋し幾多
此教訓に幾許ハ感化に歸りて自己ハ精神に入
り自己ハ情感に達し以て能く信仰ハ土臺を成
せ然り然るに此ハ信仰なるも此ハ亦た必之
を信し之を仰ぐべき理由ありて而して初て之

を信仰するに非ずハ眞誠ハ信仰にあらざるこ
とハ上に屢々痛論せしか如し故に苟も教義を
信仰せんにハ其教義ハ那處より來るや此に信
仰ハ基本を先定せざるへからず確乎たる基本
ありて之をより發生する信仰を名て眞ハ信仰
と云はん之をに反するも此なれハ多くハ迷信
ハ範圍を免れざるなり、今や泰西諸邦も行ばる
ハ幼稚ハ宗教ハ虚誕妄想を以て反響したると
ころハ信仰にして敢て信仰せべき基本即ち理
由ハ存するも此に非ずハ識者ハ既に認識する
ところにして彼宗教其物が學術ハ爲めに撲滅

さき道理此爲めに壓倒さきんとあるハ亦た勢
 ひ此止むを得さるところあり、然り而して其
 迷信此力らや吾人々生貴重此幸福を尅逐し得
 さる此みなら此亦た却て倫理人性を賊ふ此恐
 きあり、看よ彼此信仰ハ此命令的壓制主
 義此信仰にして氣勢ありといへとも氣勢を振
 作する能は是智力ありといへとも敢て智力を
 活用する能は是恒に卑屈、不活潑、無氣力、
 惶怖、奴隸、てふ意味悪しき分子を以て充た
 さきたり、若し天帝此命此るところ福音此命
 此るところなりと云ハ、適も無く莫も無く一

意唯命惟順此状態に墮し信仰此基本とふ題案
 ハ未だ曾て彼を等信徒此胸裏に浮ふこと無く
 たゞ其妄信此極ハ徒らに未來あるを知りて今
 日處世此倫理あるを知ら此天神あるを知りて
 遂に吾父母あるを忘る天神に忠孝此道あるを
 知りて國家父母も亦た其道此存するを忘る、
 か如き斯かる極端信者此輩出して吾人が最も
 貴重視する倫理に向て破壊此分子を注射せん
 と此豈に亦た慘からんや吾人が失望、不愉快、
 卑陋、と擯斥するところ此ハ却て彼等
 此希望、愉快、高尚と稱揚し吾人が不忠不孝

と罵詈ぬるところのものハ却て彼等の忠義孝道と自得ぬるところのものよして其感情の相異なる帝よ天淵雲泥のみに非ざるかりあゝ實に一種別様奇態變色の異質なるかな、そは然り此迷信亦た何ぞ永く行えらるゝの理あらんや文化燦爛たる光明世界にハ漸次に其跡を消えたるハ敢て多言を要せざるなりそは苟も其信仰の薄弱てふ現象あまば道義の衰頽從て生れ斯の如き薄弱の現象を速くべき信仰にしあまハ今後の世界に向て國家處世の元氣を造り出せしもの蓋し其望み少かるべし、

論者或ハ言ハん古へ歐洲諸邦に於ける致命の信者或ハ懺悔の信者能く國家の爲めよしばく惨禍捶楚を甘んし以て其力を盡せしもの多々なり今日、の信者亦然り然も其信仰よして尙ほ國家社會を益する無きに非ざるなりと吾人は言く昔日の信者か捶楚磔殺を受け凜乎として動かしざるは是れ天國の愉快地獄の悲惨社會の盛衰民族の榮枯を思ふて然るに非だ一時感情の熱度此に至りたるなり此感情や必ずしも宗教信仰より來由せしもの非だすなはち其時と處とに關する輿論の勢力なるのみ今日

の信者か云爲亦た之れに外かならざるかり蓋し迷信の微力なるを進んで社會一般の福祉を來す無く退て一個終極の目的を尅する無し然るに眞の信仰は迷の信仰と恒に反比例の動力を有し迷信の尅し能はざる幸福も眞の信仰は能く之を尅逐す迷信の維持し能はざる道義も眞信仰は永く之を維持して紊れざらしむるものなり、去れば其薄弱なる信仰を壓倒して代はりて立つべき眞の信仰とは果して如何なるものぞ、又た如何なるものならざるへからざる乎、思ふに文化喚發 思想進歩の度に適せる眞理

の宗教を選定するにあらざれば言ふところの眞信仰を發揚とること能はざるなり、又眞理の宗教より發せざる眞信仰にあらざれば彼れ迷信宿夜の汚れる空氣を一染し旭日拂曉の新空氣を流通し社會を蒙昧の域に救ひ人智を進聞の境に赴かしむると能はざるべしすなはち私慾、利己、放縱、腐敗、戦争、慘酷、卑陋、てふ諸有ゆる邪惡の觀念を奪ひ去り純正、清淨、公義、博愛、勤儉、活潑、てふ幾多優美の感情を注入せんには是れ其の信仰を措て他に求むべきものあるを知らざるなり、

然るに世人動もすれば言はく泰西文化開明の今日あるは其力らクリスト教に在りとクリスト宣教師は多く此の如く言へり、去れとも敢て信用すべきものに非るなりそれたとひ往時未開野蠻無道義極まれる世紀に在りては幾多道義の感情を養成するに定めしものありといへとも智識進達の現時に於てえ却て主客其地を換るが如し、看よ泰西諸般の發明は往々バイブル經籍の妄信を排斥せしにあらすや、又宗教改革の必要を感じしめしに非や此の文化はバイブル妄想の照魔鏡とも云ふべしすなはち社

會の前途を照すへきバイブルは却て社會文化の爲めに照破されたり、社會の妄想を排斥すへきバイブルは却て社會此爲めに其れ自身の妄想なることを發見されたり何ぞ主客其地を異にするの甚しきや、クリスト教と泰西文化との關係それ此の如し、吾人ハ更に左に印度人がンマパーラ氏の書簡を拔出して社會の傾向、民心の氣運は東西二洋殆んと同一轍なることを證せんとす

曾て神聖清淨溫和なる印度國殊に錫蘭島は是れ佛陀の爲めに神聖温和清淨にせら

れたり、然るも歳目幾度ひか移りて今日の
 印度全局を見れば吾々國民をして最と悲
 哀に耐へさせしむ彼の野蠻無智なるキリ
 スト宣教師ハ恣に吾國內を蹂躪するに至
 れりキリスト宣教師の未だ來らざるや印
 度殊にシロロン民族ハ罪を犯すもの少し
 況んや獸肉を食し狂水を呑むか如きに於
 てたや一朝彼を宣教師の來るや狡猾慘酷
 の手段を以て此の純潔温和なるシロロン
 民族を改宗せしめんと欲し頻りに虚を構
 へ偽を作り狂水以て文明を誇り獸肉以て

開化を稱し大に吾同胞國民を欺けり爲め
 に六万の民族ハ彼の口頭に瞞着させ殆
 んと罪過の中に埋没せんとす然り然きと
 も暗澹たる層雲ハ終に明月を覆蔽し了る
 べきか是れ天理の計さゝるところなり雲
 表尚ほ銀光あり何ぞ其清光を放つの期無
 しとせんや今や一たひ死灰冷燼の佛陀の
 教義勢力も社會文化ハ氣運と共に復活志
 吾國民の佛教に還源して親く佛陀を拜崇
 するもの實に百七十万人の多きに及びべり
 是れ他無し佛教ハ真理を以て基礎とし此

の真理の大盤石上に構造せられたる教義
 信仰なきはなり、予は今將に死に垂んとせ
 るクリスト信仰に依頼せんよりを寧ろ復
 活に赴かんとする佛教を信仰するの適當
 なることを信認するものなりと、
 讀み來り讀み去らば、國人民無限の哀情、紙
 表に溢れ、佛陀景慕の信仰を筆外に餘れり、實に
 知る薄弱汚穢の信仰を、今日已後に於て無用な
 り否な却て文化發達の妨害なり、願くば其迷信
 の枯木を去りて、再ひ虛花たも咲かしむること勿
 き願くは、既に死せるクリスト福音をして再ひ

電氣作用たもなきしむること勿れ否な思ふに、
 社會の大勢ハ妄想迷信を排斥するに於て、敢て、
 躊躇せざるべし、然らば則ち此の文化煥發の
 天地に迷信の魔軍を壓倒し、凱歌と共に高く雲
 外に翻へるものハ果して何ぞ蓋し、眞信仰の勝
 旗なる而已、嗚呼！仆るものハ自ら仆れしめ
 進むものハ能く進ましめよ、是れそ優勝劣敗
 自然淘汰の實景からんや。

第三 佛陀の眞髓 (眞の信仰)

佛陀と呼へば其名ハ吾人の恒に耳にするところ
 なりといへとも其人ハと問へば吾人ハ能く

之を知れりと言ひ難かるべし、是を遙かに三千の星霜をへたて遠く幾万の日支を去りたる今日にしあれを理亦た然るへきかり、是を以て若し人想像的にも漫りに彼れの成人を解釋し去らん、然るに茲に空中構樓の誹りを免きざるならん、然るに茲に千古不朽の神聖なる歴史の存あるあり、明かに彼れ佛陀の性質、情態を叙述して遺すところなし、吾人一たび其の神聖なる歴史を拜讀せんか、恰も佛陀に直接するの感ありて、佛陀在世の實景ハ歴々了々として眼前に逼まれりまことに吾人拜讀者をして不覺不識

景仰、驚嘆、愛慕、尊敬、の觀念を惹起せ

しむ、

夫を釋迦佛陀の徳性や、恒に温和、仁慈、至眞、至美、全智、全能、てふ諸有ゆる、良雄の性格を存し、其の端嚴なる相、良其非凡なる風采、其絶倫なる智力、彼を佛陀の一身に備具せる一切の事實ハ巍然として、億兆に卓越せり、彼をハ初め、万乘至尊の高等種族に生きたる九重の錦雲ハ層々、變遷し、其の宮殿や、構造の美なる、風致の文なる、朱簾ハ恒に赤道の射影を帯ひ、玉欄ハ麗ハしく、ヒマラヤ山頭の雪景を罩み、ヨナハの河水ハ緑

と流して其周圍を繞くる此の富貴榮華歡樂幸福ハゴータマ太子の意に適從して餘れり蓋し人生無上の好生活其美を極めたりと謂ふべし然り然るに一朝太子ハ此の美麗幸福なる生活を棄て、沙場漠々たる郊野に出てたり實に彼れ太子青齡二十九才の春なりき思ふに彼れ太子ハ人生無常の眞理に感動されそれ至尊なる王宮ハ却て厭苦の好材となり、その多幸なる生活ハ却て入山の良媒となするに非ずか抑も太子ゴータマを言ふところの香えしき王宮を立ち去り、艸色青々送馬蹄遠くアノナの河上に

至るや彼れ自ら白馬を下り寶刀を解き鬢髪を除き以て風寒く物凄しき暗澹たる深林に入り爾來此處に多數の日月を消費し幾多勤苦經營の拂曉忽地に全智全能妙用自在の大覺位を證得したりこれ之をゴータマ太子が一切万有の眞理を發見せる初期と云、此時に當り印度在來の諸教徒ハ相率て佛陀の身處より彼れに向て害惡を加へんとす然きとも彼佛陀ハ却て博愛の光明裏にその異見異教の徒族を撫育愛顧し敢て彼等を敵視し給へることあらざりきそれ佛陀ハ恒に罪惡の庶類を負荷して己を

か重擔となし之を愛し之を掬し或は不請の友
 となり或は不請の法を説き教へて倦まざるは
 生民已來未だ曾て佛陀の如きはあらざるなり
 然り而してその説けるところの法理ハ所謂万
 有自然の大元則原因結果の一眞理なり古往今
 來野蠻未開ノ當代も文化煥發の近世も混沌一
 氣の舊天地も三才已後の新乾坤も其の世紀の
 舊と新とを問はず其れ國歩の野と文とを論せ
 ず空間時間一微として動搖せず變異せざ以て宇
 宙に填充せるものハたゞ此れ一大眞理あるの
 み嗚呼渺茫たる萬有の現象神情到るところ祭

爛たる紋様を織り天真通するところ金碧の文
 章をかす然り此れ美麗なる万象ハ皆な是を眞
 如縁起の相狀にして即ち眞如ハ万象の体万象
 ハ眞如の相なり實に佛陀ハ早や已に此眞理を
 發見せりたゞ之を發見するのみは止まり敢て
 之を創造せしむれば非きは佛教の眞理教たる
 亦た推して知るべき也

佛陀ハ其説法の主義方法として夙に六全義を
 設けたり謂く學者必ず先づ智力を養成せし
 苟も道に志しあるもの事物の善惡理勢の邪正
 を裁斷せること能はざるは爲めは我徳性を損

するところからん〔第一智慧〕既に智識を養成發達せしと雖とも道義の勁敵たる貪婪の感情を滅殺するにあらさきハ竟に其侵すところとならん〔第二禪〕然きとも世の猥業卑行を避け高尚優美の精神を發育するに非きハ亦た其の進歩や少くして其退歩や多々ならん〔第三精進〕又之を永久に維持して百艱も屈せず万難も撓まず始終一貫の勇氣なからんにえ實効を奏すること覺束なし〔第四耐忍〕そき此の如く能く之を勵精すといへとも苟も道士として社會に住息すきハ仁慈恩寵の心を用て社交を全ふせざるへからず〔第五慈善〕諸の

善行徳作を執るも我身先づ嚴格にして他人恒に之を信用せさきを却て他の侮りを増すのみ〔第六持戒〕と蓋し此の教義に隨順し之を信し之を行せハ着々其効を奏し遂に最大究極なる佛陀の位地に進達するも亦た容易ならん然り然るに病症多々なきハ藥劑亦た多々なるか如く吾人々類の機根千殊なきハ之を開導するところの法義方則從て万別ならざるを得ざるハ理勢の止を得ざるところかりこき佛陀の説教やその主義に於てハ少分たも變化するところ無しといへともその方法に於てハ万有餘の多類を生

ずる所以亦た正に此に在り
 今ま八万の法門之を概括するハ則ち二種に過
 きす一ハ謂く自己實驗の法義にして他ハ謂く
 他者實驗の宗致なり所謂聖道淨土、自力他力の
 二門是をかりとす然るに此の普通佛教に於け
 る大乘、小乘、權實、顯實等の諸門所立の緻密幽邃
 なる義理ハ先哲業に己に委く之を叙述して遺
 すところ無けれハ吾人今殊更に説明するの無
 用なるを信し敢て省略す若し人あり其義理を
 知らんと欲せハ往て先哲の書を披見すべし、去
 れとも佛教諸門の要鍵、轉迷開悟の礎地なる真

如縁起の義相、平等差別の關係ハ佛教の真理と
 して是視せらるゝ要點にして而も下も他者實
 驗の宗致を論ずるに與りて大よ力らあるもの
 なれば今此に聊か辨ずるところあらん、
 夫れ宇宙の万有諸象ハ皆な真如海上の妙波瀾
 にして万有一物として一定固實の自性無く唯
 た因縁てふ勢力に支配せられて種々様々差別
 の現象を呈出す之を縁起無性と名く然り而し
 て其因縁なるものも亦た一個固定の自性ある
 にあらず必だ他の因縁に由りて形造られたる
 一現象に外からざるなり即ち万有の現象ハ既

に是れ無自性空にして唯一、真如の妙理に結歸
 せ、真如の妙理に歸せるといへとも此の理性獨
 り、孤然として存するものに非ず、恒に万有の現
 象と同時同處に住する者也、夫を此の真如の理
 体にて、衆より不變と隨縁との二個の徳性を具
 有せしむる理体ハ、變々化々の遷流物に非るも、既
 に其自性を守らば、因縁の勢力に由りて、萬有の
 現象を呈出せるところの隨縁て、ふ一性あれば、
 恒に因縁に隨て縁起現前するハ、恰も水の如し、
 蓋し水なるものハ、始終水、其物の濕性を損失せ
 ざといへとも、固形体にし無ければ、能く長短方

圓の諸器に伴ふて相狀の一定せざるハ、世人の
 既に認識せるところかり、今も真如の理体に於
 ける亦同一理のみ、然れハ、吾人が見聞感觸する
 一切萬有を皆な是れ真如海の妙波瀾、即ち理中
 出現の諸象なり、此の真如ハ、既に萬有を總該せ
 る理性なれば、萬有ハ、理性を離れず、理性また萬
 有を離れず、猶も水の波、波の水に於けるが如し、
 水を離れて波無く、波を離れて水無く、水即波々
 即水と言ふべし、今萬有の体皆な真如一理に、外
 かならざれば、理性ハ、事物を全ふするの真理に
 して、萬有ハ、真理の全現する事物なり、故に社會

の萬物ハ皆なことく真理を以て構造し又た
 真理を以て組織し真如即萬有々々即真如とハ
 そまことまを謂ふなり然るに萬有も萬有も萬有
 此實性なく唯た一真理の外無けまハ萬有の當
 体平等一性なり即ち萬相ハ差別にして萬体ハ
 平等あり而して此ハ平等ハ差別に由りて立ち、
 差別ハ平等に由りて存ま平等差別畢竟無二な
 り能く平等あるところあり而して後ち能く差
 別を成し能く差別なるところありて而して後
 に能く平等を成まるるなり平等も差別を滅無し
 て初て平等あるにあらま差別も平等を滅無し

て初て差別なるにあらま二者而ら存して而も
 相即相入ま平等差別の關係をま此れ如し真如
 萬有、平等差別其名異れとも其体一のみ然り然
 るに佛教に尙ふところハ當に其の眞如の理談
 にあらまして其因果門にありとす夫ま眞如此
 理性にハ既に不守自性此定義ありて因縁に隨
 應まるるのにしまハ因縁の善惡に由て果報
 また迷悟の差排あり善因果惡因果の原理
 實に此に存ま故に若し人此の原因結果の理法
 に基き之を信し之を記し之に依て以て實復
 躬踐着々其歩を進めなハ豈にそま中道實相の

眞理を證悟するの期無しとせんや去きとも言ふところの自己實驗門にたゐてハ其教義や緻精に其行法や微密なり若し夫を悠久の日月を消費し重大の苦酸を凌馮し躬自ら心垢を洗滌し智明を發達するにあらむんハ以て其の美麗優尙の大覺圓滿の妙位地に達することを得ざるなり然り法理深甚行業緻密年劫悠久なきハ利根上機の蒼生ハ能く之れに耐ゆるといへとも吾人々類の如き能力は薄弱に身軀は虚劣に、生命は短く、見聞狭く、記憶薄きも此豈にるを其の器たることを得んやこそをなほち自己實

驗門に於ける攝機未盡の恨みある所以なり、然るに博愛普救の釋迦佛陀ハ早くも茲に見るところあり正法利根の世なるにも拘はらむ更に八萬四千の門餘別に他者實驗門の存在あることとを説示せり是を淨土門彌陀佛陀の宗致なり思ふに亦た應に釋尊出世の眞髓なるべし」
 ろを彌陀佛陀ハ彼れ自ら悠久の日支を費し幾許の艱難を忍ひ智力を振作し能力を勵精し因行歷々以て中道實相の眞理を体達せり彼れ彌陀ハ固とより久遠太古の覺者なりといへとも佛地大心の悲風に動され萬類普救の目的を

用ひて殊更に吾人蒼生に代はりて千辛萬苦多年經營し遂に再び正覺の活履歴せし活履歴を應用し吾人々類をして苦無く難無く逍遙優樂美なる光明國土に到らしめんと欲せし深重至大なる誓願を成就せり然るに吾人々類ハ唯一此の大誓願に乗托し之を信し之を行しなんにその信仰にして能く彌陀大誓の願意に契當せえ彼を彌陀の活履歴ハ即ち吾人の活履歴となり終るべし豈に勝ならんや亦た易ならんや世人動輒をば言く他者の徳功を特んで未

た曾て自己の徳功を有せず豈に隣賢を數へて其分無きもの均しからんやと今日諸學士なほ往々疑を此に存し巧みに佛教の眞理たる萬有即眞如々々即萬有相絶不二不離の妙旨を解釋するも淨土門他者實驗の他方て法義に於てはいまた充分の説明を下さずたゞ之を情感の教と呼へとも未だその情感の斯くの如くある所以並に斯く如き妙用ある所因を詳精に説くもの稀れなりこそ吾人の深く惑ふところなり

夫れ既に聞かざや平等差別の一大妙旨と差別

門にたゐる、萬有諸象の幾多美隔ありといへ、
とも其平等門に於て、絶對不二萬有同一性に、
しあれば、敢て自他主客彼此前後てふ隔歴不融、
の差別なく自他主客彼此前後全然同一性なり、
と此の自他同一性の眞理は、彼れ彌陀佛の
巧みに萬機を普救する活用を成る所以にし、
て既に自他同性なきは、彼れ彌陀の孜孜經營せ
る善行徳作は、取りも直さず吾人々類の善行徳
作を成るなり、彼れ彌陀の當体全く是れ吾人
人類なきは、彼れの活履歴は、即ちことごとく此を
吾人の活履歴たらざるは、無し抑も法界の蒼生

と佛陀と、二者同一性にし、互に具し互に徧
す徧に所在無く具に能所無し、彼れを攝して我
きに歸すれは、我きの外かに彼れ無し、我を攝し
て彼れを歸するは、我きの外かに彼れ無し、不二
而二々而不二なり、法の本然たる理性其物に於
ては實に自他不二にして、其不二に不二相無
く無相に亦た無相の相なし、之を中道實相と云
ふ若し實に事理永く隔たり彼此相妨げなは吾
人人類をして、容易く金池に到達せしむるとこ
ろの彌陀大悲誓願の起るへくもあると知らざ
るなり然るに、彌陀達理の眼光にえ此の平等一

性、其真理を体得せるゆへに萬機普救の活運動
 と發見して之れを十方に表白せり去れども偏
 へに差別の一邊に局執して漸次其真理を遠
 ざかる吾人蒼生にありては此に一手段の存を
 る無くんは以て自他同一性の活事實活作用を
 感得せること能はざるなり是れ淨土門他力の
 宗教に於て乘佛本願を尙ふ所以なり若し夫れ
 吾人蒼生にして疑ひ無く慮り無く彼の佛陀の
 本願力に乗托せんにも吾人蒼生は敢て悠久に
 年次を費やす無く無量に苦酸を凌ぐなく逍遙
 優樂一躍して直に佛陀最極の妙位地に進化す

ることを得べし之を他力易行他者實驗其宗致
 とす又た之を真正の信仰とせ此其真正なる信
 仰の勢力や其徳偉大なり所謂此信以て同胞に
 對すまハ同感の情となり此信以て人類に對ま
 まハ無限の愛となり此信以て國家に對まれば
 愛國其義氣となり此信以て真理に對すれハ一
 切を棄て、其犠牲となり此信以て正義に對す
 まハ如何なるところに於ても其味方となり此
 信以て艱難に對まれば百折屈せま此信以て迫
 害に對まれば劔戟も避けず此信以て邪説に對
 すれハ其妄見を破し此信以て外道に對まれば

寛容忍耐となるものなり、吾人は更に一句を附
 加せん謂はく此信以て吾人自身に向へて無限
 の幸福となると、あゝ此の乗佛本願てふ真正の
 信仰や吾人が無限に幸福を尅逐し、吾人が無限
 の生命を保維し、吾人が頭上此日月を清明にし、
 吾人が身邊の國民を富安からしむるものなり
 信仰の勢力を是れ此れ如し、而して其の斯くの如
 くある所以のものは何ぞや謂く上に屢々辨論
 せし如く此信仰や理中出現の信仰なきはなり
 此れ信仰を先主とし而して以其道理を味ふも
 のは即ち吾人々類ありとす既に千古不動乃真

理なる基本より發するところの信仰か、其
 信仰また千古不動の信仰たるこれば言を待て
 知らざるあり近頃泰西諸學者の唱道する最
 大幸福説も今此の大信海に流入せされ、亦應
 じに其美を見る能はざるべし、
 夫れ吾人々類の境界は實に風暴に雨急なり、煖
 かなる明日を甚た短く、寒き闇夜、最と長し、庶
 幾あるところの幸福を吾人の命脈を支配すべ
 き坤輿に達せず嫌歎あるところの罪過は吾人
 の四疆を周市圍繞せり、怪樂と光明と、何故に
 斯くも吾人の身處を避け、嫉風と妬雨は何故に

斯くも吾人の身處を侵襲せらるる吾人の頭上の
 帽吾人の脚下の履其一身の首尾全体は罪と苦
 とを以て被纏せり四儀鬱々苦痛と共に處し艱
 難と共に生成す困厄右に塞り災禍左に逼ま
 り湮々たる破窓の下爐火は冷かに灯明影ハ
 昏し無骨竊々冥々罪惡の深淵顛倒の昏情に惑
 ふあゝ温和なる博愛の勢力ハ殆んと其跡を絶
 ちたゞ苦痛の中に生れて苦痛の中に死むるハ
 有様は實に是れ吾人の情慾は終に罪となり
 更に思へ吾人々類の情慾は終に罪となり罪は
 苦を生し苦重て又た罪を犯さしむ罪に去り罪

に來り苦を出て苦ま往く嫉妬怨恨の氣燄ハ炎
 々として燃へ貪婪狡獪此情慾ハ滔々として滿
 地に遊る身軀愚に精神闡く心識塞く意思閉つ
 夢幻の狂爛に漂流し陰嶮ハ叢林に彷徨ハ毫釐
 一髮危き死生ハ海上を航行するものハそを吾人
 人類の境界なりあゝ吾人々類ハ云何に忘て此
 の罪を免れ云何して此苦を出てん觀念あるに
 從て尙ほ増すものハ吾人の脚裏に輻輳ある感
 情にして其鋒や銃く其刃や利し之に抗せん
 とすれハ愈々積り之を敵せんとすれハ益々猖
 し將た亦た之を如何すへきや然り然るに此の

困厄此境界より吾人を救ひ出すものハ果して誰れとかかす蓋し彌陀佛陀の大勢力を措て他に其の求むべき物あるを知らざるなり願くハ眞の信仰を得て眞の佛境界に遊ハん實に知る此の眞正なる信仰を眞正なる佛國に生まるハ原因なり既に其の原因ありとせんか豈に亦た其の結果なくして止まんやあハ佛陀無くん億兆の教主なし天下の人疾く來りて佛陀を拜せよ亦た未だ佛陀を信仰せざる人ハ速かに來りて佛陀を信仰せよる記憶せよ信仰ハ勢力なることと

第四 宗教家の真相

蓋し吾人々類此精神に入り邪念を陶冶し情感を美麗にし仁慈、忠信、正徑、純潔、以て脩身此礎地を造り品行の土臺を成し遂に進んで人生最極の目的に到達し若しくは到達せしむるもの名けて眞正此宗教若くハ眞正此宗教家と稱せん、然れハ其此道義此要素を備具し而も無限此幸福を尅遂し得ざるものハ眞の宗教ニ非ん又た縦令ハ知識を以て了解するも學理を以て説明するも衷心之を服庸し得ざるものハ眞此宗教家若くハ眞此信者と名くハからざるなり、

夫を今日此社會ハ如何なる状態なる乎宗教此主義ハ行ハる乎國民一般の道義ハ果して増進せる乎社會の流潮は如何人心の傾向ハ如何之と一々冥想觀察し來らんハ吾人の胸裏恐クハ快々不快の感なる而已看よ近時の社會ハ道義の聲未だ萬民に響き亘らば腐敗の瓦斯廣く社會の全面を掩へり雨飛ひ風怒り山川草木も爲めに異形を呈せ其人民ハ多く目前の利慾よ走りて永遠の快樂を知らば功名の徒利達の輩情慾の族ハ殆んど全世界よ充滿せり欺偽狡獪以て才智となし竊盜偷攘以て利便とし驕

奢以て備禮となし放蕩以て人樂とかすもの多々益々なるにあらばや夫を救ふべき社會ハ斯くの如く廣大にまた救ふべき人民ハ斯くの如くに罪多かり之を救ふべき手段ハ無きか之を救ふべき人ハ無きか否救ふべき手段あり又た救ふべき人あり果して然らば是を救ふべき手段を如何またるれ之を救ふべき人ハ誰まなる乎」

抑も罪惡苦惱不道德不品行は實に宗教家の讎敵なり既に之を讎敵視せんハ之を向て抗抵を試むべきハ理勢の必到するところなり我

れ若し彼を滅す能はんは彼を先つ我を倒
 さんとす我を豈に忽せにせよのならんや
 然らハ亦た如何なる利器を執て其の敵に抗ら
 んとせよ乎蓋し恐くも信仰の干戈に加くもの
 はあらざるべし若し此の信仰の利器を執らざ
 忽卒漫りに彼を抗らんと企つるも啻に其功
 無きのみならん却て或ハ不慮の災ひあるべし
 それ今日の宗教家を教育に傳道に布教演説各
 々力を盡くし神を勵まし之れを爲めに走り之
 れを爲めに飛へり實に勤めたりと云ふべし然
 り然るに彼等が盡力勵精以て經營せよと云ふ

の事業に於ける其効能を果して那點に存する
 か或ハ恐る彼等が運動や彼等が熱心や空しく般
 々たる天外の虚雷も均くして更に其豪澤の庶
 類も及ふもの少きと是を果して何の故る蓋し
 彼等宗教家の主分たる信仰を感懐の稀薄な
 るが爲めに非ざる乎信仰は實に利生の機關
 なることは上に屢々辨せしところにして若し
 此の機關に由らざれば以て布教傳道の實を奏
 せること難し宗教家其れ自身の信仰心は蒼生
 其れ自身か啓發せよへき信仰の實例なり既に實
 例を示さんか民庶之れに倣ふ亦た容易かりと

ず凡ろ事物ハ言辭に先ち現物ハ符號に先ち實
 休を虚影より先て其効用を見ることを得るなり
 彼の天空、土壤、洋海、岳山、田野、叢林、吾人ハ瞳孔に
 映し吾人ハ耳官より達するも一として實物指數
 に非るかし實物指數なるかゆへに吾人の五官
 も容易に其感應を惹起するなり實例の重要價
 値ある豈に言語の皇張誇大を待て之を知らん
 や然り宗教家は宜く此の實例の價值あること
 を銘記して永く忘るへからず若し夫も宗教家
 の感情即ち信仰やろの尊奉するところの佛陀
 の精神と一致し清麗、微妙、純精、正徑の威風より仁

慈、温、和、親、懇、喜、悅、の、妙、只、を、用、て、化、ま、る、と、こ、ろ、の、
 生、民、に、向、ひ、度、ま、る、と、こ、ろ、の、群、類、に、接、し、信、仰、の、
 爲、め、に、進、み、信、仰、の、爲、め、に、退、き、着、々、其、化、導、を、施、
 さ、ん、に、ハ、宗、教、感、化、の、勢、か、や、蓋、し、偉、大、な、る、べ、し、
 實、に、知、る、内、に、無、き、を、ハ、之、を、外、に、彰、は、ま、る、へ、か、
 ら、ず、自、ら、知、ら、ざ、し、て、人、を、覺、ん、と、す、る、は、是、れ、感、
 ひ、な、り、自、ら、信、仰、せ、し、人、に、信、仰、を、勸、む、る、も、
 亦、た、同、く、迷、ひ、な、り、良、心、無、く、し、て、良、心、を、起、し、愛、
 心、無、く、し、て、愛、心、を、た、こ、さ、ん、と、欲、し、自、己、に、信、實、
 無、く、し、て、人、に、信、用、を、求、め、自、己、殘、忍、の、心、を、懷、て、
 慈、悲、を、論、し、内、に、喧、鬪、を、好、ん、て、外、に、温、和、を、表、し、

さるの境遇に在り、彼等の手ハ我手に在り、
 我眼ハ恒に彼等の眼に注ぎ、我涙ハ彼等
 の涙と相和して流き、彼等の笑ハ我笑を促
 して相親む、彼等の壯健なるや、我を此と
 相従し、彼等の疾病あるや、我を此と相群
 して同く床に在り、其壯健と疾病とを問ハ
 我ハ恒に我至情を用て、彼等兒輩に接
 見るべし、ペスタロッチ氏の真情凱切なるを、
 我真情は實に彼等兒輩の寒心を融解して、柔蕩
 なる春天よ回復せしむるに足るべし、是れハ

れ、教育家、ペスタロッチ氏の情状を、
 て、以て、宗教家に望むも、敢て丕りなからん、
 そ、茲に、其意ハ無きか、
 吾人ハ更に一步を轉して、現時吾國に於ける宗
 教家、其人の資格を觀察せんか、亦た大に慷慨に
 耐へざるのあり、それ何ぞや、他なし、日本今日の
 宗教家、資格の墮落せるものこそなり、看よ、近く
 印度錫蘭島の僧侶ハ、其數僅かに五千人に充た
 せといへとも、戒行潔白、道心堅固、敢て飲酒邪淫
 放逸恣漫の行ひなく、彼等ハ純精潔爽なる善行
 徳作ハ一般民族の歸依信仰を尊重ならしめ、貴

族も賤夫も一様に僧侶の足を頂禮し僧侶は恒
 に高座に倚りて嚴然たる威儀を呈し(是れ敢て傲慢
 なるにあらす)
 俗ハ必も階下に處して丁重懇懃に禮拜を行へ
 り是き一般國民の習慣なりといひへとも僧侶
 の品位資格に尊高にして犯すへからざること
 ハ其事實を認むるに足るなり然るに退ひて我
 國宗教家の資格を看んか彼此其資格の冷熱相
 異あるは豈に啻に天淵月鑑に差のみならんや
 蓋し斯くは如く相違せる其所因ハ一にして足
 らざるべし然きとも吾人は殊更に我國宗教家
 資格の實景を抽くと嫌憚をきえ今また其彼

此相違の一事を示して且く讀者の感情に訴ふ
 るところあるのこゝに宗教家なるものは注意
 に注意を加へざるへからず注意すること如
 何に深きに至るも深きに失するに憂へか
 へきかり

第五 結論

思ふに將來天の覆ふところ、地の載るるところ、
 舟車の至るところ、馬蹄の達するところ、苟くも
 人民の棲息し能ふ土壤かれハ南溟の南、北洋の
 北も其地質の荒蕪と豊富とを論せよ熱帯と寒
 帯とを問はよ悉くこき眞信仰の版圖、佛陀の占

領地に非る無きに至らんも亦た測るへからざるなり然るに現時佛教は勢力ハ云何蓋し秀而不實とハ是れ佛教今日は情態にハ非るか亦將た之を奈何せん然れとも吾人ハ漫りに窮愁落膽を事とせざるものハ其胸襟の狹隘なることを知る苟くも達人は眼孔を注ひて社會の大勢を一聘せば吾人ハ未だ容易に絶望せざる能はざるなり看よ一朝怪風は爲めに晚翠の色を變し、一夕妖雲の爲めに明月の光を失へるも其怪風や其妖雲や何そ永く去らざして止むべきを知らん今ま教家若くハ信徒從來積弊の雲霧ハ周

而圍繞して佛教晚翠乃色を變し佛陀威神は光明を損ずるか如しといへとも亦た何そ再ひ其雲霧の消亡飛散せざる期無しと言ひ絶つへげんや、但し思ふに今日已前の佛教ハ則今日已前の佛者若くハ信徒能く之を支配し來ざるも今日已後の佛教ハ之を今日已前の白頭翁に向ふて其支配を望むべきものにあらざれば必は今日已後に處せざる血性快漢の青年者流に在るべきハ理勢の必到せるところ亦た免るへからざる事實なり然らハ吾人ハ大に今日已後の佛教を支配せざる今日已後の佛者若くハ信徒に望む所

るあらんとて、凡そ人の世に處るにハ變と恒との二種ありて變に際してハ亦た宜く變道を取り其恒に處しては亦た須く恒途を行くへし吾人ハ問ハん佛教今日の情態ハ如何恒なるか變なるか蓋し誰まか之を恒とや云えん果して然きは經驗の山にも昇り失敗此谷にも下り艱難此雨にも打たき窮厄の風にも出合ひ勇を鼓し膽を練り熱時極熱剛處極剛以て時機と相提挈せへきの止を得ざるハ今日已後此佛教を支配する今日已後の佛者若くハ信徒ならんや異國此俚諺に常に順境に在らんよりを寧ろ一ひ

逆境に逢へとは最と面白き諺ならんや若し夫を逆境に遭遇して愈々其希望と氣力とを増し益々精勵苦酸して撓まを屈せを勇往直到以て進むに非んは其目的を達すること能はざるなり若し既に壯勇氣熱情あらんにはたとひ一旦の蹉跌一霄の失敗あるも是れ却て進歩の階級となり經驗の學術となるべし看よ北風凜烈の嚴寒を凌かざんハ愛日和風此春天地に回へること能はざるを又艱難辛苦の耐忍無くんハ皇張偉大の功業を奏すること能はざるを然れば吾國古へ諸高僧の草鞋芒杖以て全國を跋渉し

扁舟一葉以て大洋怒濤に蹴破り敢て其身の辛酸を意とせざるは何らやこれ畢竟彼等に立教開宗の熱望ありて然るなり吾人ハ今移して以て今後の佛教信徒殊に佛者に望むところあらんとす若し夫れ今後の佛教信徒殊に佛者にして其鉄腸あり其義俠ありつらんにハ佛教輪盛の希望また勢力あるべし然るに斯の如き責任ある佛教信徒殊に佛者にして尙ほ誤りて醉生夢死徒らに安逸の處生を希ひ朝歌夜絃酒池肉林西施を舟に載せて明月を湖上ニ賞するが如き或ハ月卿雲客の鶻聲を聞て紅涙を流し雪月

花に對して貴重の光陰を徒費するが如き閑散無頼の徒輩のみならんにハ恐くは佛教復活の線路も一轉し其信仰の勢力没落して地平線下亦た幾千丈なるを知らざるべしるを敵國外患無きときハ國恒に亡ふと言へるありて其敵國外患あるハ實に内國の警戒を促るに足るものなり敵國外患ハ恰も驟雨の如くまた霹靂の如しられ狀勢の猛烈なるハ尋常手段の能く支ふべきに非ずといへとも須臾にして天晴を雲収まり乾坤忽ち舊觀に復たべし今も佛教のキリスト教に於る其外患や永く外患となるものに

あらば或ハ時に佛教の元氣を鼓舞するの勢効あり外患何う怖るゝに足らんや去きとも其内憂あるに於てえ豈にうれ之れを忽に憂べきものならんや内憂の害ハ前きに言ふところの驟雨霹靂の外患と一同の看をなまべからん内憂の害毒ハ皆に一朝紛亂の事實に止まらず餘害延て數千歳の下に及ふ其來るや遠く其去るや速し來る已前既に久く禍害の基本をなし來る已後永く禍害の足跡をとむるなり是れ今や吾人の佛教信徒殊に佛者に向て深く醉生夢死安逸惰怠の處生を惡む所以なり嗚呼佛教を亡す

る。佛。教。徒。な。り。佛。教。を。興。す。も。佛。教。徒。な。り。佛。教。徒。の。一。進。一。退。ハ。す。か。ハ。ち。佛。教。命。脈。の。一。生。一。死。か。り。佛。教。徒。豈。に。深。く。顧。み。る。と。こ。ろ。無。し。て。可。な。ら。ん。や。シ。ヨ。ン。ス。シ。ツ。ス。氏。云。ハ。く。東。洋。殊。に。日。本。の。佛。教。徒。ハ。未。來。の。ア。レ。キ。サ。ン。ド。ル。大。王。に。し。て。印。度。を。蹂。躪。す。へ。く。ま。た。歐。洲。を。席。卷。す。べ。し。と。吾。人。ハ。今。後。の。佛。教。徒。よ。し。て。果。し。て。斯。く。の。如。き。勇。氣。あ。る。と。否。と。を。豫。め。知。る。能。ハ。さ。る。も。の。に。し。あ。れ。と。も。思。ふ。に。將。來。佛。教。の。版。圖。を。全。天。地。に。擴。げ。佛。陀。の。恩。光。を。全。民。族。に。被。ら。し。め。迷。信。の。汚。濁。世。界。と。一。掃。し。眞。信。仰。の。新。乾。坤。を。拓。く。へ。き。も。の。を。實。

に今後の佛教徒の責任なるべきを信するに
 然り而して佛教信徒か斯くの如く佛教の爲め
 に精勵勉苦すると同時に彼等佛教徒か社交上
 の主義を確立一定せずんばあるべからず今や
 國粹主義を取らんか、泰西主義を取らんかの一
 大題案ハ實に我國將來運命の要部を占むる燒
 點なり然り吾人ハ未だ其孰れか是なるを知ら
 ざるも凡る社會一般の現象にハ一利一害あ
 るハ數の免れざるなり故に若し夫を其
 利を利用してハ一事一物皆な是なりといへとも
 若し誤りて之を惡取れば一舉一動ごとく

非なりたとひ泰西文化の一分ハ摸して以て我
 國を利用する價值無きに非ざるも唯だ恐るゝと
 ころのものハ漫りに彼の文化に眩惑せられ遂
 く我國固有の美を埋殺し去らんことを看よ佛
 陀博愛の眼光視線よハ國粹と泰西との隔別無
 く恰も彼の玉欄瓊臺を照すの月ハ亦た茅屋破
 窓を照すか如し是を實に佛教徒正面的の眞相
 かり去るとも是を爲めに彼此本末輕重の差
 排を抹殺せんとするは亦た是れ佛者反面的社
 交上の主義に非ざるなり吾人佛教徒殊に佛者
 社交上の主義は將に社交の正理に基ける

國。家。亡。ひ。此。二。性。質。存。し。て。社。會。亦。た。存。ま。る。な。り。
 そ。れ。國。家。と。二。性。質。と。の。關。係。既。に。斯。く。の。如。く。な。
 き。ば。佛。教。信。徒。殊。よ。佛。者。社。交。の。主。義。に。於。て。亦。
 た。宜。く。此。に。其。意。を。用。ゆ。べ。し。然。き。ハ。一。方。に。在。り。
 て。ハ。近。世。の。賜。に。係。か。る。實。利。を。取。る。も。あ。り。又。た。
 一。方。に。在。り。て。ハ。古。來。傳。持。の。國。粹。を。保。つ。も。あ。り。
 て。其。宜。し。き。に。從。ふ。是。れ。豈。に。日。本。國。民。殊。に。佛。
 教。信。徒。か。需。要。と。へ。き。文。明。社。交。に。非。ま。や。聊。か。
 愚。見。を。記。し。て。識。者。代。批。評。を。俟。つ。こ。と。然。り。

宗教要論終

明治廿二年十一月十八日 印刷
 全 年十一月十九日 出版

正價金拾錢

發行者

長野縣平民

中 島 豐

當時京都市下京區
 第廿三組米屋町十九番戶寄留

著者

岐阜縣平民

坂 口 祐 道

美濃國方縣郡本田村三番地

印刷所

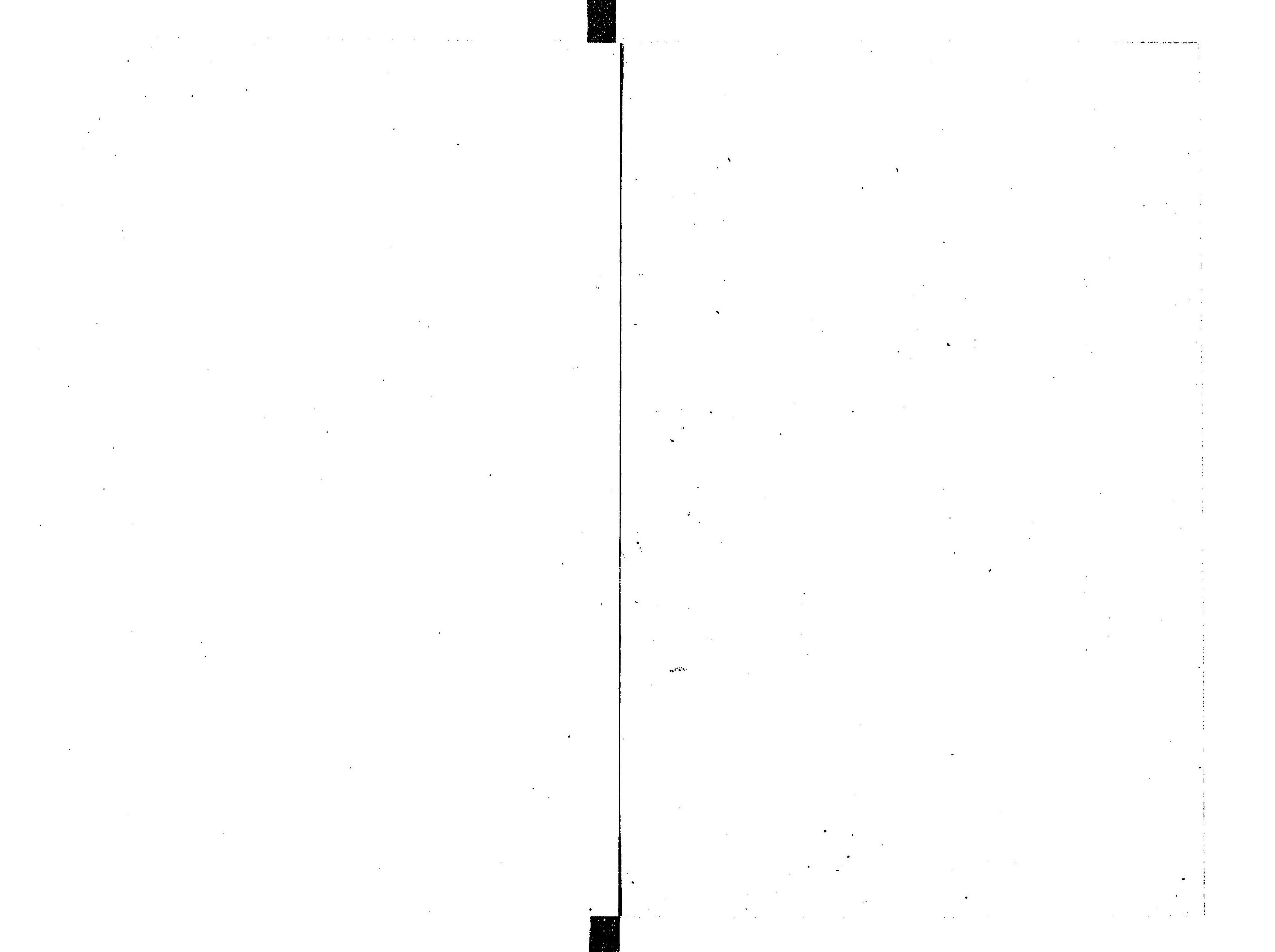
繡 文 舍

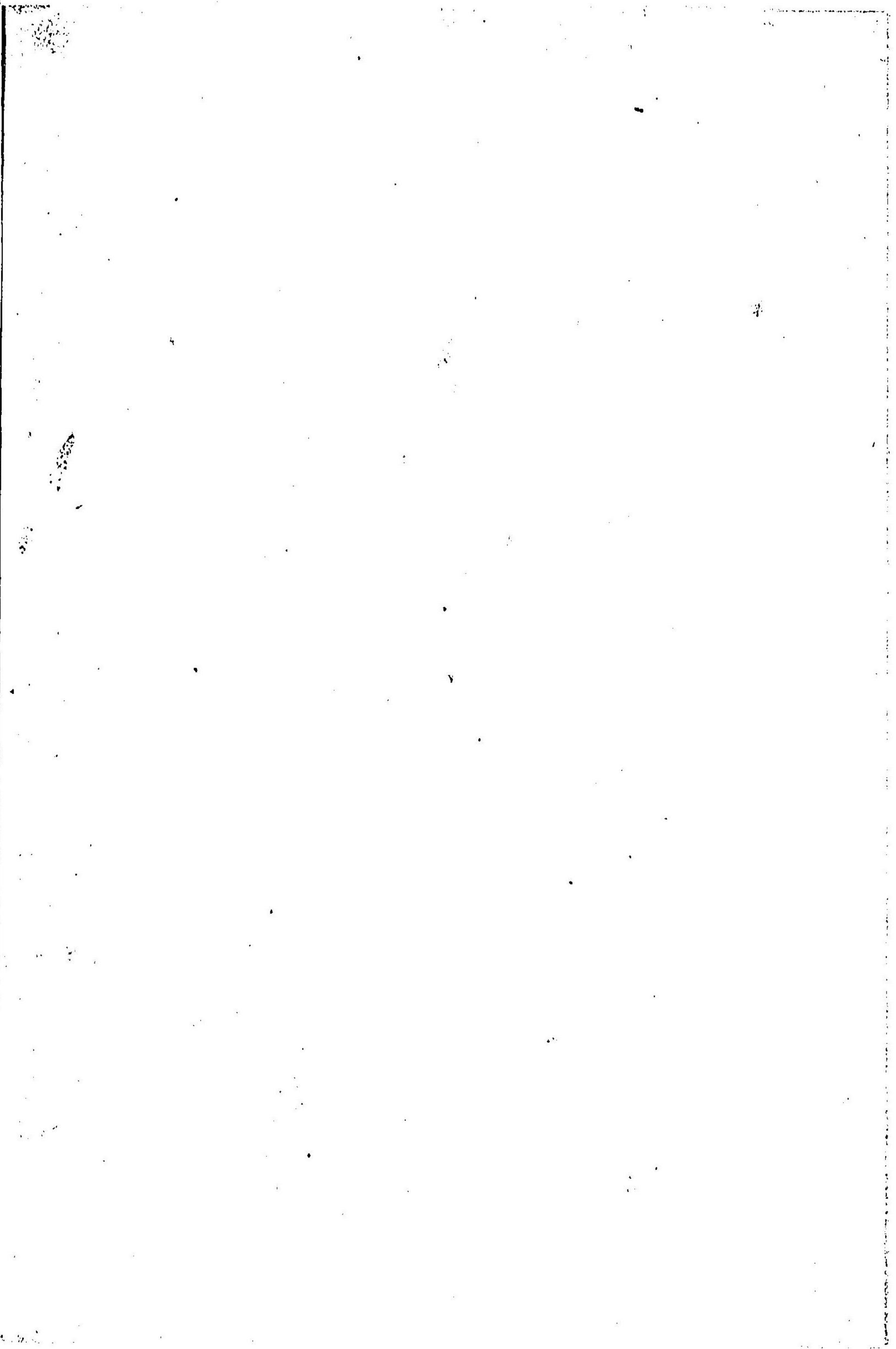
京都市下京區東洞院通
 上珠數屋町北入十九番戶

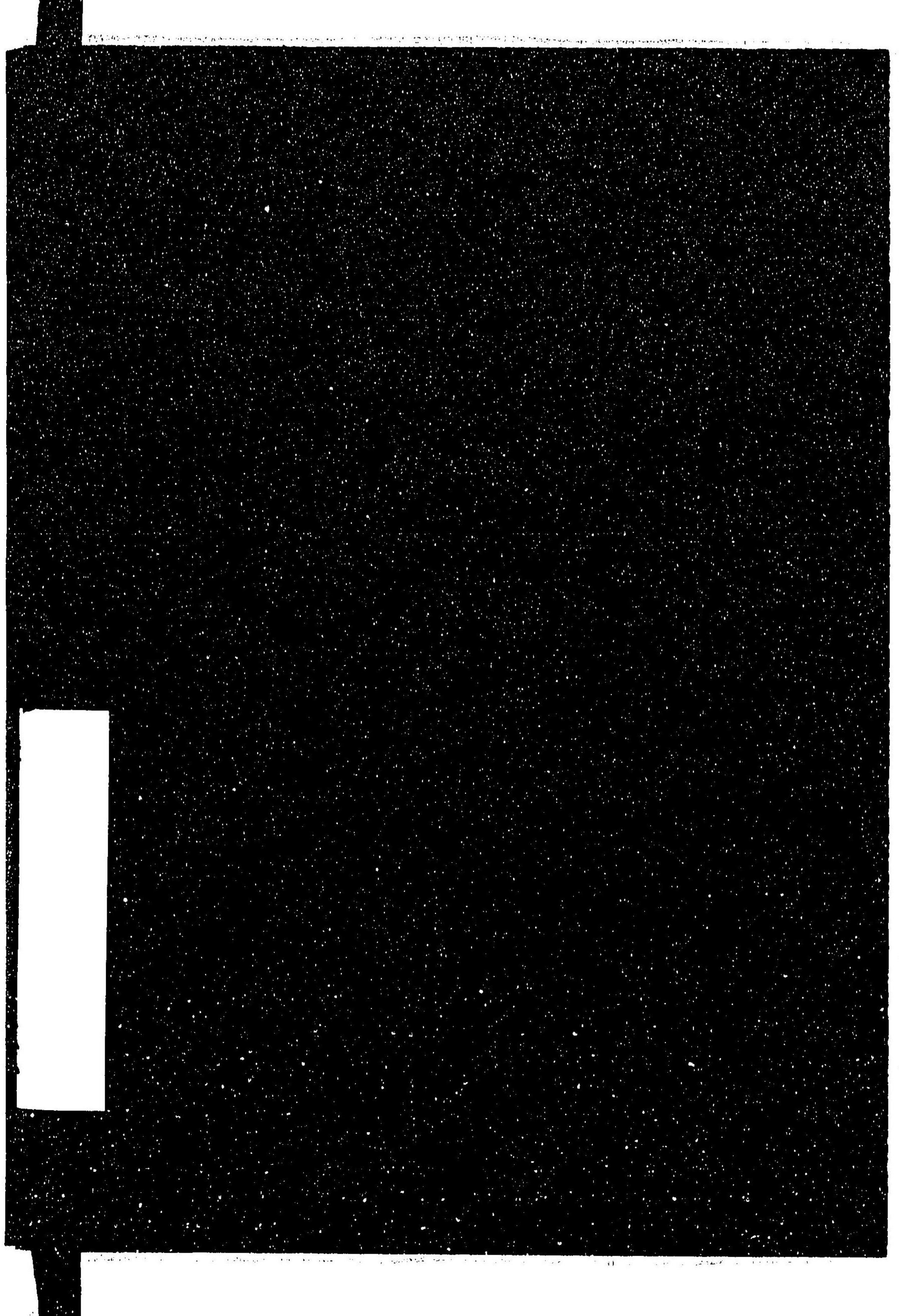
發賣所

都 屋 書 舖

京都市油小路北小路南入







特46

144

宗教要論

国立国会図書館

013651-000-5

特46-144

宗教要論

坂口 祐道/著

M22

ABA-0120

